



福島へ帰ることを決めるまで

避難生活を続けるか、福島に帰るかは、とにかく、ずーっと悩んでいました。北海道にいるときは、café もりのすみか（からからvol.2.6ページ掲載）の立ち上げメンバーとして働いていました。あのカフェは、避難移住したお母さん達と応援してくれる北海道の人達で協力して運営していて、私にとって本当に大切な居場所で、それは今も変わりません。自分が福島に帰るということは、そこから離れることになりまから、まだその場所ががんばっていききたいという気持ちが強かったんだと思います。仲間たちは、私が悩んでいたことも知っていたし、とても理解してくれていたのですが、自分の決断に自信が持てず、何気ない会話の中でも、その度に自問自答して心が揺れる日々でした。何とか北海道に残る方法はないかな？ってずっと考えていても、どうにもならなくて、福島に帰ると決意したあとも大泣きしてしまったりもありました。夫が離れて暮らしていることで、日常の些細な会話もできず、一番理解し合いたい相手がそばにいなかったからかもしれません。北海道で家族一緒に暮らすことでもよかったし、夫もその気持ちはあったのですが、長期化した母子避難での現実的な問題や負担が積み重なり、移住に踏みきることができませんでした。

邊見 悠香（へんみ ゆうか）さん

平成23年10月に福島県白河市から札幌市厚別区へ二人のお子さんと母子避難。6年5か月の避難生活をやめ、平成29年3月から福島県白河市の自宅に戻りました。福島へ帰還することを決めるまでの経緯や、今の暮らしについてお話を伺いました。



福島での食生活について

福島県での町おこしは、地産地消が大前提であって、子どものことを考えると賛同できないと思っているので、食材を買うときは意識しています。父が白河市東地区で無農薬野菜を栽培していて、子どもたちも『じいちゃんの野菜がおいしい。』と言っていていますし、父も孫に食べさせたくて栽培してくれています。東地区はもともと放射能汚染レベルは低い地域ではありますが、土の入れ替えや放射能測定をしてくれたりと、父なりの気遣いをしてくれています。放射能のことだけではなく、農薬や添加物のことも考えて、季節的に他県産が手に入りづらい時期は、父の無農薬野菜をもらってくることもあります。お米と調味料は県外のものを選んでいて、北海道のお米が美味しいと子供たちが気に入っているのが、福島に住むようになってからも北海道産を購入しています。

給食も、福島県が地産地消を推奨していることであって、なかなか（福島の食材が放射能汚染されているかもしれないことについて）理解されないのがつらいですけど、学校にも理解していただいて、給食ではなくお弁当を持参させています。迷いは



正直ありますが、福島で暮らしていく上で全ての放射能を避けるということは本当に難しいと実感しています。

今の暮らしと、これからについて

福島の家は、平成22年の12月に購入したばかりでした。色々な手続きが終わって一段落した頃に震災が発生したので、すぐに売却する気持ちに切り替えることができませんでした。買ったばかりの家を離れ、北海道で6年間母子避難が出来たのも、夫の理解があったからこそです。母子避難を続けている中、夫は『何のために働いているんだろう...』という虚無感に襲われることもあったようです。北海道から福島に一時帰省していたときは、福島の家を整理するよりも、家族と一緒にいる時間を大切に過ごしていたので、未だに6年前で時が止まったままの荷物もあって、何とも言えない気持ちになることがあります。

今も、北海道から福島に帰ってきたことが正しいのかは分かりません。私自身も迷いながら、その迷ってることも子どもたちには伝えているので、母親が悩んでいることも理解してくれています。子ども達は外遊びを沢山したい年頃ですが、むやみに外のものに触れないように遊び方を変えたりと本人達なりに判断や自粛をしていて、そんな姿を見ると胸が痛みます。そんな、ひとつひとつのちいさな我慢の積み重ねがつかなくなる時もあります。例えば、外で運動会をすること、校庭にシートを広げて観戦したり、お弁当を食べること、雨に当たること、プールに入ること。普通なら当たり前出来ることを気にして、制限していることがストレスになって



しまいます。それでも元気に過ごせるように、食事に気を付けながら家族で過ごすようにしています。

今は福島に帰ってきましたが、何かあったときはいつでも動けるような気持ちでいます。どうなるかは分からないけど、モノを増やさないようにしていて、断捨離もしています。福島という土地に住むことへの執着よりも、これからは家族と一緒にいることを続けたくて帰ってきました。夫も私も、今こうして家族と一緒に暮らせることにとても幸せを感じていますが、生活環境を考えると不自由に感じることも多々あります。放射能の影響がどれくらいあるのか分からないので、自宅の庭にある芝生の上では子供を遊ばせることもしていませんし、ウッドデッキには震災後に座ったこともありません。福島に住んでいる今も日々大切に暮らしていきたいですが、今後、もし万が一、どこかに移住を考える時があれば、次は家族みんな一緒に動こうと思います。

子どもたちは、外で思いっきり遊べる北海道のことが今も大好きです。私にとっても、大好きな場所ですし、子ども達の事を自分の子どもや孫のように可愛がってくれた人がたくさんいる、ふるさとです。北海道での6年間は、思い出さない日は無いくらい、私の支えになっています。こうして、取材という形を通じて北海道にいる皆さんとお会いできることは何だか恥ずかしい気持ちもありますが、とても嬉しいです。またそちらに帰るときは子どもたちの成長を見てあげてくださいね。